

現代中国の書家二十人を紹介する不定期連載

中国当代書家二十人



西泠印社名誉副社長の高式熊氏は、秦の李斯から始まった伝統的な小篆の第一人者。中国でも深い芸術性と高い評価を有する。故郷の浙江省寧波市をはじめ、吳昌碩古里の浙江省安吉市、そして上海市に隣接する江蘇省太倉市と、計三カ所の「高式熊芸術館」（美術館）が建設された。大家を、郭同慶氏が取材した。

（編集部）

第二回

高式熊

書／郭同慶

高式熊 こう・しきゆう

一九二一年、浙江省鄞県（現・寧波市鄞州区）生まれ。中国著名書法家、篆刻家。西泠印社名誉副社長。上海市書法家協会顧問、中国書法家協会会員、上海市文史館館員、上海民建書畫院院長

安且吉兮



襟懷孺子牛



不薄今人愛古人



三点とも原寸



伝統的な篆書・篆刻の第一人者

取材・文／郭同慶

▽▽書法篆刻への深い造詣

現在の中国では、現役で健在の書画篆刻家の個人名で命名された美術館を運営する行政や民間の文化基金は珍しくない。しかし、西泠印社名誉副社長の高式熊先生のように、故郷の浙江省寧波市を始め、呉昌碩古里の浙江省安吉市や上海市に隣接する江蘇省太倉市をあわせて三カ所の「高式熊芸術館」（美術館）が建設されているという方は極めて稀である。それは先生の書法篆刻の造詣や人気の象徴ではないかと思う。中国では書画同源や書画印三つ巴といった概念がある。印人の高式熊先生は、中国でも有数の篆書の大家であり、秦の李斯から始まった伝統的な小篆の第一人者である。

先日、上海に行き、フランス租界の景観を思わせる市街地にある高先生の邸宅を訪ね、九十七歳になる先生にお話を伺い、先生がいつでもどこでもどんな詩文でも、正しく美しい篆書で書くことができる背景を探った。

▽▽清朝の翰林院太史の息子

高式熊先生は「書香門第」と言われる学問の家柄に生まれた。父の振霄氏（一八七七—一九五六）は浙江鄞県（現・寧波市鄞州区）の出身、科挙制度で官僚になった儒学者である。隋から始まった科挙制度は約一三〇〇年を経て、清朝光緒皇帝の時代になると、各国の列強の侵入や内乱により終焉を迎えた。その廃止直前の年、光緒甲辰（一九〇四年）に

振霄氏は恩科殿試を合格し、官廷で詔書などを起草する翰林院に配属され、七年間ほど翰林太史（文書官僚）として光緒皇帝に支えた。初期に一年間ほど日本に研修で派遣されたことにより、帰国後に翰林院で大活躍した。しかし、一九一一年に孫文が興した辛亥革命により清朝が倒れ、三十五歳の振霄氏は失職した。その後に振霄氏は康有為や沈曾植などの清朝遺臣たちと同様に、身の安全が守れる租界地である上海に移住したのだ。儒学者・振霄氏は学問と書写を以って家庭教師になり、上流社会の「執鞭子弟」（富家の子弟）を指導した。振霄氏の学問や指導方法が高く評価され、立派な「翰林先生」「太史公」と呼ばれていた。

一九二一年に振霄氏の息子・高式熊が浙江鄞県に生まれ、六歳のときに上海市静安区「文化人村」と言われる「四明邨」にある父親の家に移り、一緒に暮らすようになった。近所に文豪の章炳麟、詩人の



父・振霄は、科挙制度で官僚になった儒学者であった

徐志摩・陸小曼夫婦、ならびに書画篆刻大家の王福庵、来楚生、呉待秋、呉青霞なども住んでいた。同年にその近所で中国共産党が誕生した。七月一日にフランス租界地・望志路（現・興業路）で僅か十二名の代表（毛沢東を含む）が参加した第一回中国共産党代表大会が開かれた。同じ年、中国の南方では、孫文が二次革命を興し、広州で革命政府を作り、北伐戦争を発動した。言わば、高式熊は大変な乱世の年に生まれたのだ。

その後の中国は内戦状況下で、学校教育は正常に行われず、憂慮の末に振霄氏は息子・式熊の教育は他人に委ねずに、自宅で特別メニューを組んで自身が実施したのである。

父の指導は厳しかったと高式熊先生は振り返る



父・振霄（右）とともに

た。

五歳の誕生日を過ぎたら、読み書きの勉強がスタートした。最初に触れたのは《三字経》《千字文》である。後、大人になるまでに《大学》《中庸》《論語》《孟子》の四書、《詩経》《尚書》《礼記》《周易》《春秋左伝》の五経、ならびに唐詩宋詞などを勉強させられて、国語力を身に付けた。

書道の勉強は、六歳より始まった。まずは父の振霄氏が臨書してくれた歐陽詢の《九成宮醴泉銘》の大楷手本で学び、九歳になると同じく歐陽詢の《皇甫誕碑》、そして顔真卿《顔勤礼碑》《顔氏家廟碑》、柳公権《玄秘塔碑》へと進んで日に三時間ほど練習し、楷書の基礎に打ち込んだ。その上で、李邕（李北海）の行書《麓山寺碑》《李思訓碑》、そして李斯

が始皇帝の命を受けて大篆を簡略化した美しい小篆《始皇七刻石》や唐の李陽冰《三墳碑》《城隍廟碑》などの臨書を重ねた。

父親の厳しい指導の中で、一番苦行だったのは、九歳のときに始まった《説文解字》の勉強だったと言う。《説文解字》は中国の最古の文字学の書。前漢文字学者・許慎（五八？—一四七？）の撰文による、小篆文字の字形分析、字意詮解および音調弁識の字典だ。非常に難しい内容で、今は限られた極少数のプロしか触れることがない。しかし、高式熊先生はその《説文解字》十五巻の五四〇種の部首、九三三三の文字、そして一一六三の異体字、計一〇五一六の文字を暗記させられた。前例のない特訓方法で、何と毎日に五〇字を抄写および暗記し、《説文解字》全巻を写し、数年の間で何と四遍も抄写したのである。青少年期にこのような厳格な文字学の基礎を叩き込まれたことが、後の篆刻や篆書創作に多いに役立つことになった。

二人の貴人との出会い

高式熊先生は儒学者の父の人脈で、たくさんの人化人や書画家と触れ合う機会を得た。その中でも書家人生に最も影響を与えた二人の貴人に出会ったと言う。一人は、父・振霄氏の同郷の友人で趙叔孺先生であり、もう一人は近隣の知人で王福庵先生である。父・振霄氏の引き合わせで、すぐに両先生と親しくなり、「忘年の交わり」となった。

その頃の趙叔孺先生や王福庵先生は、書画篆刻壇上の重鎮である。

趙叔孺先生（一八七四—一九四五、名は時桐、字は獻忱）は、父・振霄氏と浙江郵県の同郷である。趙先生は「近世の趙孟頫」と絶賛されるほど、当時の書画印壇で巨匠だった。その頃、上海提籃橋で書

齋「二弩精舍」および書画塾を営み、沙孟海、陳巨來、徐邦達らも指導したのだ。高式熊先生はほぼ毎週「二弩精舍」に通い、練習作を持参し添削してもらった。また高齢の趙先生は門下生の中で張魯庵氏を引き合わせ、張氏と「亦友亦師」の親交がこの頃に始まった。

近隣の王福庵先生（一八八〇—一九六〇、名は禔、字は維季）は、上海で活躍していた西泠印社創始人の一人である。王先生は篆書、隸書を能くし、特に篆刻に優れた。中年の頃、北京の印鑄局で技正を務めながら故宮博物館鑑定委員を兼務したことがあり、五十歳（一九三〇年）になると仕事を辞めて、書道や印学に専念のため上海に移住した。代表的な著書《說文部属檢異》一卷や《麋硯齋作篆通假》十卷はその専念した努力の結晶である。または王先生は均勢が正しい秀美適勁である小篆を上海および

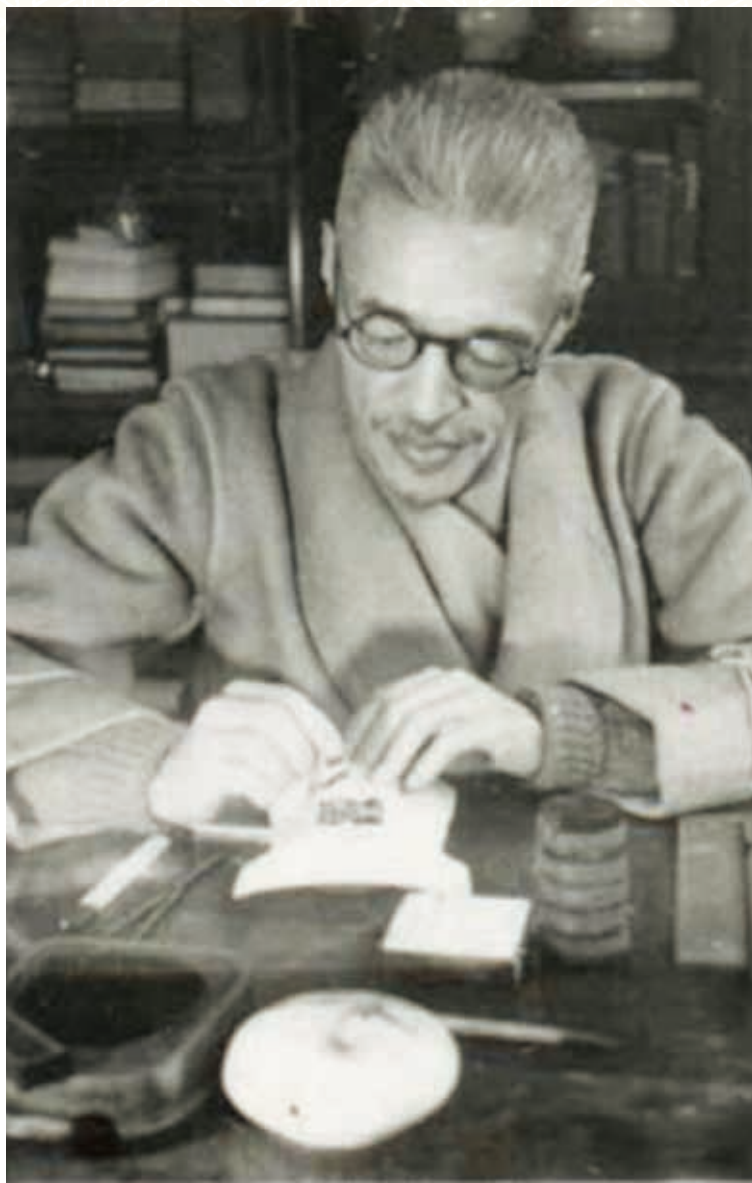
全国へ流行らせた小篆の巨人であった。その指導を受けた高式熊先生は、青少年期で学んだ《說文解字》の基礎と融合させて、堂々として古典的な正しく美しい小篆を書けるようになった。

高式熊先生はその後、数十年の研鑽を重ね、今では伝統篆書の第一人者となり、秦の李斯から始まった小篆については、二千年以上の歴史のなかで、李陽冰、王福庵と並ぶほど深く名前が刻まれている。

▲▲▲ 亦師亦友・張魯庵氏

高式熊先生は、二十二歳（一九四三年）のときに趙叔孺先生の「二弩精舍」で張魯庵氏（一九〇一—一九六二）を紹介され、張魯庵氏との「亦師亦友」の付き合いが始まった。

張魯庵氏は、歴代印章や原鈐本印譜の蒐集で「海内第一家」と讃美された大收藏家だった。生前に遺



「亦師亦友」の付き合いをした張魯庵

言を残し、蒐集品を一括にして西泠印社へ寄贈した。西泠印社は「望雲草堂」という特別陳列室を設けた。実に驚くほどの量と高い質の寄贈であり、原鈐本印譜が四三三部、歴代官職印や私印、また皖派浙派印人の代表作・印章が一五二五顆である。

張魯庵氏は面倒見がよく、原印や印譜は何でも貸してくれたという。高式熊先生は黃士陵（穆甫）の印風が好きだったので、張氏は《黟山人黃穆甫先生印存》上下二冊をプレゼントしてくれた。また毎回、印人原印數顆を貸してくれて、高式熊先生は模刻したものを持参し、張魯庵氏の批評を求め、さらに意見を持ち帰って、繰り返し模刻したことが何度もあったという。

篆刻の勉強として、鄧石如、趙之謙、黃士陵といった最高レベルの印人の原印と直に触れ合い、また、趙叔孺先生、王福庵先生、張魯庵氏らといった方々に批評を聞けるというのは、贅沢な環境としか言いようがない。高式熊先生は猛勉強し、篆書および刻印の腕は日に増してレベルアップしていった。各種の展覧会に招待されるようになり、書作や印章を求められるようになった。一九四七年、西泠印社の創始者・王福庵先生と丁輔之先生の推薦により、二十六歳という若さで西泠印社に入社。今年はちょうど入社七十周年になる。現在は、西泠印社の最長老で、名誉副社長を務めている。

また高式熊先生は、二〇〇八年に中国政府によって非物質文化遺産所持者とも認定された。先生は若い頃に張魯庵氏の「魯庵印泥」の研究開発に助手として参加し、その「四十九号配合」を把握している唯一の人物なのである。「魯庵印泥」は質も色も均一で冬にも硬化しない特徴があり、書画巨匠の張大千、吳湖帆、賀天健らによって愛用されていたこともよく知られている。



心不厭精手不怠熟 古不乖時今不同弊



西泠印社の最長老であり、今年で97歳。書はもちろん、篆刻でも現役である

取材の終わりに

取材の終わりに高式熊先生に著書をたずねた。先生は《西泠印社同人印伝》《高式熊印稿》《高式熊篆書観月記》《高式熊臨文徵明行書》を出版している。そして今年で九十七歳になる先生は、上海で一番活発な現役の書家であり、また一番の「売れっ子」である。近年、中国国内三カ所の「高式熊美術館」を始め、各種団体より企画展や記念講演などの打診が殺到。これらの要望に対して、ご本人も積極的に受け入れ、協力している。昨年の暮れ、市炎黄文化研究院が主催した「一片氷心・高式熊書法篆刻展」が長寧図書館で開催され、今年初めには朶雲軒集団が企画した「滴墨成鳳・高式熊迎春書法展」が上海一番繁華街の南京路朶雲軒芸術館で盛大に催された。さらに三月二十五日には「高式熊書法・篆刻芸術シンポジウム」が「安吉高式熊芸術館」で開かれた。主催者の代表である同館長の葉志敏氏は「高式熊先生は当代において、古典書法を誠実に継承した最も高いレベルの芸術家であり、また常々、慈悲の心を持つ最高の人格者である」と讃えた。私も同感に思う。高先生の更なるご長寿と一層の活躍を祈っている。



郭同慶
かく・どうけい

在日中国人書画家。一九五七年、上海市生まれ。字豫之。王蘧常、錢君匋、蕭海春に師事。一九八七年來日、現在、前橋市在住。東京芸術院院長、東京海派書画院常務副院長、全日本華人書法家協会副主席兼秘書長、豊道春海顯彰会顧問、公益社団法人日中友好協会参与、群馬県日中友好協会理事、東京・中国文化センター書法講師